

雑司が谷旧宣教師館だより

第 62 号

2018 年 12 月 15 日

豊島区立雑司が谷旧宣教師館

〒171-0032 東京都豊島区雑司が谷 1-25-5 TEL/FAX 03-3985-4081

スプリングコンサートを開催しました

5月13日に行われたスプリングコンサートでは、佐藤瞳子さん（ヴァイオリン）、米丸咲季子さん（ピアノ）をお迎えし、演奏していただきました。

「いつも演奏している曲ではなく、今演奏してみたい曲を」というコンセプトで曲を選んでくださったとのことで、「愛の挨拶」の穏やかな雰囲気から始まり、ピアノソロ「狂詩曲第13番」や、最後の「ツィゴイネルワイゼン」など華やかな曲まで、全7曲を演奏していただきました。

当館のコンサートは20年以上前から行われていますが、コンサートの開催日は天候に恵まれることが多く、当日の午後から雨が降り出した際は少々驚きましたが、演奏と雨音が合わさって、より印象的に聴こえました。



▲トーク中、演奏中、終演後の写真。ライトで明るく見えますが、外は雨が降っていました。

日本に建てられた洋館である旧宣教師館のデザインを鑑賞する

～コースターづくりのイベントに関連して～

当館では、今年の夏に親子向けの体験講座として「旧宣教師館のデザインを使ったコースターづくり」を開催しました。その様子は4ページに記載してありますので、そちらを見ていただきたいのですが、ここでは講座に関連して、消しゴムはんこのデザインに使用したデザインをベースに、「日本に建てられた洋館としての旧宣教師館」についてお話したいと思います。

建造物をデザイン的な面（装飾等）から鑑賞する際は、壁、屋根、窓、階段、あるいは欄間やマンツルピース（暖炉とその周囲の装飾）など、多くの見どころがあると思います。また、すぐに目につかなくても、建物内をじっくり見ると、思いがけない場所に日常生活を彩るデザインがあります。あるいは、博物館などの施設では、使用されていた時代の生活を再現するための家具などが置かれている場合もありますが、そのデザインなどが、当時の流行を想起させるかもしれません。

そういった視点から見つけることができるもののうち、旧宣教師館の夏のイベントで使用したデザインは、全部で5つ。建物から3つ、当館所蔵のオルガンから2つを使用しました。

建物由来のものは、①建物正面にある屋根の切妻部分の下について半円形の窓、②上げ下げ窓の上部にある、ひし形の装飾、③花を2つ並べたような形の通気口です。



▲消しゴムはんこに使った旧宣教師館のデザインとスタンプのデザイン。左から、①半円形の窓、②窓のひし形の装飾、③通気口。

まず、上記のデザインを見て、どのような感想を持たれるでしょうか。半円形の窓については、文化財に指定されているような歴史的な建造物のみならず、現代の住宅でも使用されていて、目にする機会も多いかも知れません。通気口も、それ自体は珍しくありませんが、文化財建築などを見てみると、それぞれにデザインを持っています。建築によっては家主の家紋を用いて作っていることもあるようです。

では②の窓の飾りはどうでしょうか。ひし形と縦線を組み合わせた模様が繋がったデザインで、あまり出会う機会がないかもしれません。

・旧宣教師館の建築様式とデザイン

建築のデザインは、建築の様式を判断するための「特色」となる場合があります。豊島区教育委員会が発行した『雑司が谷旧宣教師館建物調査報告書』には、「20世紀初期までのアメリカ木造住宅との比較考察」という項目があり、造形デザインや平面計画の観点からの所見、そしてマッケーレブの出身地であるアメリカの住宅との比較考察が述べられています。②の上げ下げ窓のデザインに関する記述を引用します。

「外見細部で目につき易いのは上げ下げ窓の棧組さんぐみと玄関庇の方杖ひさし ほうづえ、そして破風板尻はふいたじりのくり形である。（中略）

アメリカの木造建築でこうした職人芸が発揮されるのは、19世紀中頃のゴシック復興様式のうち、いわゆる大工ゴシック様式と呼ばれるものである。(中略) またこの様式では、窓に斜め格子がしばしば現れる。破風板が過度に装飾化されるのもこの様式の特徴である。これらを総合すれば、(中略) アメリカ19世紀中頃の木造ゴシック様式が、日本の大工仕事に合うものと考えて導入したものとする。[1]

この所見で述べられた「大工ゴシック」、すなわちカーペンター・ゴシック様式は、上記の通り、19世紀にアメリカで流行した、ゴシック様式のリバイバル(再復興)のうちに出来上がったものです。12世紀にヨーロッパで生まれたゴシック様式が19世紀にアメリカで流行したとき、住居をはじめ、木造の建築物が多かったアメリカの当時の風土や[2]、糸鋸などの大工道具が改良されてデザインの幅が広がったこと[3]などもあり、「カーペンター・ゴシック」として現れたのです。素材こそ石から木材へと変わりましたが、ゴシック建築の教会にあるような尖塔のイメージや屋根窓、「ジンジャーブレッド」[4]とも呼ばれる華やかな縁取り装飾をつけることで、ゴシック建築の雰囲気を残しています。②の飾りは、引用にある「斜め格子」にあたるものです。ひし形の窓飾りはカーペンター・ゴシックに度々現れ、全面がひし形で覆われたもの、上部だけひし形になっているものなどがあります。[5]

旧宣教師館の設計者は不明ですが、アメリカで発展したこの装飾様式を良く知る人物であったことが伺えます。日本の建築とは違う、ゴシックの要素が取り入れられた当館は、当時の地域住民には「お城のよう」とも表現されたようです。[6]

・日本の洋館建築としての旧宣教師館

次に、①の半円の窓についてはどうでしょうか。洋館、あるいは洋風の住宅だとよく見かけます。では、和風建築ではどうでしょうか。

そもそも、木という直線状の部材を組み立てて形を作る日本の伝統的な建築では、曲線が生まれにくかったのです。対して、石やレンガを積み上げて壁や天井を築くことで作られた西洋の建築では、ドアや窓など開口部を作る際、その上部を曲線にすることで上の部材の重みを均等に下に流すために、建築に曲線が発生することになりました。[7]

幕末から明治時代初期に洋館建築が建てられ始めると、西洋建築らしさを求めて、壁に木材を使っている場合でも、デザインとして半円窓がつけられることもありました。他国からやってきた様式をそのままではなく、その様式を象徴するデザインとして自国の風土に落とし込む点は、カーペンター・ゴシック様式の発生と似ているといえるかもしれません。

ヨーロッパの影響を受けアメリカで発展したカーペンター・ゴシック様式が、さらに、アメリカ人宣教師の来日によって日本に今も残っている、というのも、歴史や文化の積み重ねを感じ、興味深いものです。他にも文化の交わりが垣間見えるデザインがありますが、それはまた、次の機会に紹介したいと思います。

脚注

- [1] 豊島区教育委員会『雑司が谷旧宣教師館建物調査報告書』、pp.29-34
- [2] 桐敷真次郎『明治の建築：建築百年のあゆみ』、p.21
- [3] オズバード・ランカスター(白石和也訳)『絵で見る建築様式』、p.96
- [4] 八木幸二監修『アメリカの家2』、p.100
- [5] 参考文献、及び[1]を参照
- [6] 「雑司が谷旧宣教師館だより 第33・34合併号」
- [7] 山口廣監修・江口敏彦著『洋風木造建築 明治の様式と鑑賞』p.123、p.250

参考文献

Alma deC.McArdle and Deirdre Bartlett McArdle, *Carpenter Gothic Nineteenth-Century Ornamented Houses of New England*
山口廣監修・江口敏彦著『洋風木造建築 明治の様式と鑑賞』

旧宣教師館イベント報告



▲見本。窓の飾りを繋げると、花のようになります。



▲コップの縁をなぞって丸いコースターを作成中。

制作後、参加した方に工夫した点について尋ねると、インクが50色ほどあったからか、「納得のいく色が選べました」「渋めの色でまとめました」など、色についてこだわった、という感想が多くみられました。また、「デザインはひらめきが大切だと思うのですが、形を色々と工夫してデザインできるのも楽しかった」との感想も頂きました。配布したプリントの見本のように消しゴムはんこを押したり、自由にたくさん押したり、それぞれの発想を活かしたコースターができました。

8月26日に親子向けの体験講座を開催しました。

今回制作したのは、「雑司が谷旧宣教師館の中にある装飾をモチーフとした消しゴムはんこを押してつくるコースター」です。

当館の建物は1907年にアメリカ人宣教師の住宅として建てられたということもあり、あまり豪華な装飾は見られません。ですが、質素な作りのなかにも、細部には日々の生活を彩る装飾がみられます。

参加者にはまず、今回使う消しゴムはんこの元となったデザインを、旧宣教師館の1階の中から探してもらいました。配布したプリントに書いてあるヒントを見ながら様々な場所にあるデザインを発見。

次にデザインが彫られた消しゴムはんこを使い、コースターを作っていきます。



▲はんこ、定規などの道具と完成品。
バインダーに挟まっているのは、色見本です。